

前何鹿郡視學小原龜松編

國語學びの栞

卷の二

發行所 郡是製絲株式會社

4

1-31

國語學びの葉卷の二目次

第一課	親切の報	一	第十一課	物の價	二
第二課	處世訓(一)	四	第十二課	はわい出稼人の手紙	三十四
第三課	がらすの製法	六	第十三課	母の愛	三十七
第四課	果斷	八	第十四課	自他共に喜ぶ天地の道	四十二
第五課	處世訓(二)	十三	第十五課	動物と植物との關係	四十四
第六課	天氣豫報と驚報	十五	第十六課	忘れがたみ(一)	四十七
第七課	氣のかはり易き男	十八	第十七課	忘れがたみ(二)	五十一
第八課	人の勤惰	二十一	第十八課	地震	五十五
第九課	胃の説諭	二十三	第十九課	訓言	五十七
第十課	運の意義	二十七	第二十課	子どもの看病(一)	五十九

明治
42 11 9
二
九

第二十一課 子どもの看病……六十六
 第二十二課 孝子ピール(一)……七十二
 第二十三課 孝子ピール(二)……七十五
 第二十四課 女子の天職……七十八
 第二十五課 勅語……八十二
 書簡文……八十五
 轉居を知らず……八十五
 病氣快復を知らず……八十六
 法事に人をまねく……八十七
 馳走になりたる禮狀……八十八
 約束をこころる……八十九
 宿所を問合す……九十一

縁談につきて問合せ……九十二
 奉公口の周旋をたのむ……九十四
 買物を頼む……九十七
 醫師をまねく……九十九
 故郷にある妹に贈る……百
 舊主人に奉る……百二
 他に嫁きたる娘に……百四
 旅行先の夫に贈る……百七

國語學びの葉 卷の二

小原 龜松編

第一課 親切の報

あめりかの、ある山の中を通つてをる鐵道線路から、すこしはなれた所に、みすほらしい小屋をたて、娘ひとりさ、かつ、此世を送つてをるやもめがありました。別にこれと云ふ職業もないので、雞を飼つたり、薪をさつたりして、近くの町に賣りに出て、わづかにくらしをたて、をりました。

ある年の春、山の雪がとけて、其の水が、一時におし出して、やもめの小屋のそばの谷に架けてある、鐵道の橋をおし流してし

まひました。けれども、それは夜中の事で、そのうへに、雨がひどく降って、たつたので、其の事を知つてゐるものは、此の親子の外には、誰れもありません。あゝ。今にも汽車が來たら、車も人も皆谷に落ちてしまふであります。

此の時其の親子は「何かかして、其の橋の落ちた事を知らせたい。」と思つて、いろいろその手段を考へたすゑに、やゝ思ひついたのは、薪を鐵道線路の上に、積み重ねて、それをたくこゝでありました。そこで、ふたりは、さゝそく薪を運んできて、それに火をつけました。

まもなく、ぐわうぐわうと音がして、機關車のあかりが見え始めました。しかし、まだ機關手が其の火を見つけぬのか、汽車

はたいそう早く來ます。そこで母親は、じぶんの着て居る着物や、物をさいて、竿のさきに結びつけ、それに火をつけて、高くさしあげながら、線路の上を駆けまはりました。娘も、これにならうと、木の枝に火をつけて、高くさしあげながら、駆けまはりました。けれども、まだきづかばしいので、車を止めなさい。車を止めなさい。」と聲のつゞくだけ、さげびました。

すると、機關手は見なれぬ火を見つけ、人のさげぶ聲をも聞きつけて、「何かかした事でもできたのか。」と思つて、すぐ汽車を止めやうとしましたが、急にはさまらないで、親子のゐる所で、やゝとまりました。車掌や機關手や乗客などは、皆汽車から下りて、其のわけをたづねました。親子は自分たちの力で、人々

の命を救ふことができたのを喜んで、人々を谷の所につれて
いって見せました。人々はこんな事があらうとは、夢にも思ひ
ませぬでしたので「われは、全く此の親子に助けられたの
だ。此の親子はわれ々の命の親だ。」と、いって、あつく禮をの
べ、金を出し、あつて此の親子に贈りました。鐵道會社でも其の
お禮として、金をたくさん贈りました。其のおかげで、親子は、
一生らくに、くらしたと云ふことであります。

第二課 處世訓 (一)

二宮尊徳先生曾て、人を誡めて曰く、夫れ空腹なる時、他に行き
て一飯をたまはれ、われ庭をはかむと云ふことも、決して一飯を

ふるまふ者なかるべし、空腹をこらへて、先づ庭をはかば、或は
一飯にありつくことあるべし。これ己れを捨て、人にした
がふ道にして、行はれがたき事も、行はれやすきものなり、我れ
若年はじめて家を持ちし時、一枚の鋤くわ損じて用をなさず。隣
りの家に行きて、鋤をかしくれよといふ、隣りの人曰く、今此の
畑を耕し、菜をまかむとする所なり、まきをばらざれば、貸しが
たしと云ふ。我れ家に歸ることも、別になすべき仕事もなし、我
れ此の畑を耕しまぬらすべし。と云つて、耕し、菜の種を出され
よ、序にまいて進ぜむ。と云ひて、耕し、且つ蒔いて、後に鋤を借
りしことあり。隣りの人は、鋤に限らず、何にても入用のもの
あらば、ゑんりよなく申されよ、必、貸しまぬらすべし。といへ

ることありき、斯の如くすれば、百事差支なきものなり。汝新に一家を持たば、必此の心得を忘るべからず。又汝は年尙若し、終夜いねざるも、さほりなかるべし、夜々ねる暇をばげみて、つこめて、草鞋わらじ一足或は二足を作り、他日仕事場に持ち出し、わらぢの切れ破れたる者に、あたへむに、受る人禮せずといへども、もさねる暇にて作りたるものなれば、其の分なり。禮云ふ人あれば、それだけの徳なり。もし又一錢半錢を出すものあれば、此れ亦それだけの益なり。よくよく此の理を忘れずして、ばげみ勉めなば、必出世うたがひなし。

第三課 がらすの製法

がらすの用は、はなはだ廣し。見よ。らんぶ、藥瓶、皿、こっぶ、鏡、電氣燈のほや、窓の板がらす、などの類より、けんび鏡、望遠鏡、種種の眼鏡のれんず、寫眞器械に用ふるれんずなどに至るまで、みながらすにて、造りたるものならずや。じつに、がらすは人間快樂の父、學問進歩の母とも謂ふべきなり。がらすは、ふつうにまじりものなき石英の砂に、炭酸たんさん曹達せうたつ、石灰などをまぜ、るつぽに入れて、強く熱し、其のこけて、どろどろになりたる時、之を種々の形に造り、しだいに、冷し固めたるものなり。すなはち、らんぶなどのほや、瓶などは、此のどろどろになりたる汁を、がらす又は鐵の長き管の先につけて、しやぼん玉を吹くが如くに、吹きおぼし、之を型かたに入れて、形を正したる

ものなり。また板がらすは、かく吹き飛ばしたるものを切りひろげて、造りたるものにて、皿、こぶなどは、かの汁を直ちに鑄型に入れて、造りたるものなり。がらすは、前にのべたる石灰の代に、みつだそとさいふものをまぜて、造ることあり。けんびきよう、望遠鏡などのれんずは、皆此の種のがらすにて、造りたるものなり。此の種のがらすは、光強くして、はなはだ美麗なれば、又種々の裝飾品を造るに用ひらる。がらすの精良なるものは、未だ我國にては、多く造られずして、おほむね、外國より輸入せり。くちをしき事ならずや。

第四課 果 斷

ある年の夏、汽船が大西洋海岸のある港に泊つてゐた。其の日は、たいそう暑い日で、乗組の人々は、皆苦んでゐた。晝すぎになつて、船長は「泳ぎたいものは泳いでよい。」と云ふゆるしを出した。人々はたいそう喜んで、着物を脱いで、どんぶどんぶと海にさびこんだ。そしていろいろな泳ぎ方をしてゐるのが、いかにもおもしろさうである。

中にも殊におもしろさうなのは、まだ年のゆかぬ二人の子どもで、きやくと笑つて、しきりに、うきをめあてに、泳ぎくらをしてゐる。其の子どもの一人は、此の汽船の大砲掛の子である。大砲掛の子は、初めには、ずと相手をぬいてゐたが、うきから三十間ばかりの所で、急に相手にぬかれてしまった。相手はおほ

かた勝をえやうとしてゐる。大砲掛は、此れまでにこにことして、二人の様子を見てゐたが、今、じぶんの子の負けさうになつたのを見て、「おゝい。どうしたのだ負けるな。負けるな。」と、いってしきりに勵ましてゐる。ちやうど其の時「ふかだ。ふかだ。」と云ふ恐しい聲が聞えた。すぐ近所で泳いでゐる人々は、あわてゝみな汽船に泳ぎもどつた。子どもらは、まだ何も知らずに泳いでゐる。四五町むかふに、せなかだけ見せて、泳いで來るのは、なるほど見るも恐しい、大きなふかである。ふかは、だん／＼と子どもに近づいて來る。

大砲掛は、氣が氣でない。ただ、こんかぎりの聲を出して「むきをかへる。むきをかへる。」と叫んでゐる。しかし其の聲も、子どもらの耳には入らぬのか、まだ、きや／＼と笑つて泳いでゐる。

助けのボートはおろされた。しかし、こても、まにあひさうにもない。ふかは、い／＼と子どもに、せまった。子どもは、始めて、それを知つて逃げやうとしてゐるが、こても、にげおほされさうにもない。

あゝ。此の時、大砲掛の心は、どんなであつたであらうか。大砲掛は、ふ／＼と思ひついて、大砲の側に寄つた。そして、いそいで丸をこめて、き／＼とねらひをつけた。云ふまでもなく、ふかを撃たうとしてゐるのである。しかし、丸が子どもにあたるやう

な事はあるまいか。

助のボートは、まだよほど遠い。ふかの口は、もう子どもにつきささうである。

「あ」と、みんなが叫んだとたん、ずどーん、一發、すさまじい音がした。

大砲掛は、すぐ手で顔をかくした。人々も、みな息をつまらせた。

しばらくの間、海は煙におほはれた。しかし、其の煙の消えるにつれて、まづ目にはいったのは、あの恐ろしい、大きなふかの死骸であった。

喜の聲は、どっこ一度に、あげられた。

子どもは、助のボートに乗せられて、歸つて来る。大砲掛は、大砲にもたれて、無言で、それを見つめてゐた。

第五課 處世訓 (二)

二宮先生年若きもの數名をいましめて曰く、世の中の人を見よ、一錢の柿を買ふにも、二錢の梨子を買ふにも、頭の心のますくなる、きずのないものを選びて取るにあらずや、又茶碗を一つ買ふにも、色の好き形のよきを選び、撫でて見、鳴して音を聞き、選りに選りてゐるなり。世人皆然り、柿や梨子は買ふといへども、悪しくは捨て、可なり。其れさへも此くの如し、されば人に選ばれて、聲となり、嫁となる者、或は仕官して立身を願

ふ者、己が身にきずありては、人の取らぬはもとよりの事、其のきず多き身を以て、上に得られねば、上に眼のないなど、上を悪しく云ひ、人をさがむるは大なるまちがひなり。自ら省みよ、必おのが身にきずある故なるべし。それ人身のきずとは何ぞ、たごへば、酒がすきだとか、酒の上が悪いとか、ばうたうだとか、勝負事がすきだとか、情弱だとか、無藝だとか、何か一つ二つのきずあるべし。買手のなきは、あたりまへなり。よくよく勘考すべきなり、古語に、内に誠あれば、必外にあらはるゝなり。きずなくして、賣れぬと云ふことなし。それ何程艸深き中にも、やまいもがあれば、人がすぐに見つけて、捨てはおかず、又泥深き水中に、かくれたる、鰻、鱒も、必、人の見つけて捕ふる

世の中なり。されば内に誠の光あつて、外にあらはれぬはずなし。此道理よく心得べし。

第六課 天氣豫報と警報

われわれは、空氣の中に、住んでゐるものであるから、空氣中の現象げんしやうすなはち、晴れる、曇る、雨が降る、風がふく、と云ふやうな事は、われわれの生活のうへに、非常に、關係のある事である。したがつて、それを前もつて、知ると云ふ事は、大いに必要なことである。

學問上では、空氣中の現象を氣象きしやうといふ。氣象臺や測候所は此の氣象を調べる所である。

わが國では、東京に、中央氣象臺があり、各府縣に、すくなくとも、一箇所は測候所がある。各府縣の測候所は、其の地方の氣象を調べて、之を日に三度づつ、電報で、中央氣象臺に報告する。中央氣象臺は、東京地方の氣象を調べて、それと、各府縣から報告して來たものによつて、毎日、其の日の午後六時から、其の翌日の午後六時までの、全國の氣象を考へて、之を電報で、各測候所に報知する。之を全國天氣豫報といふ。各測候所は、此の全國天氣豫報によつて、其の地方の氣象を考へ、また、中央氣象臺も、東京地方の氣象を考へて、之を報知する。之を地方天氣豫報と云ふ。全國天氣豫報や、地方天氣豫報は、中央氣象臺測候所、又は他の役所などの前に、掲示することになつてゐる。

ので、われわれは、之を見て、あしたの仕事などを、前もって、きめることができるのである。

また、中央氣象臺は、その調によつて、もし、ある地方に暴風、暴風雨などが起りさうだ。」と思ふときには、すぐ電報で、其の事を各府縣の測候所などに報知する。之を暴風警報と云ふ。此の警報を受けると、その測候所や、信號所では、すぐに、其のしるしを掲げる。此のしるしは、警報の種類によつて、いろいろあるがおもに、晝は赤い球、圓筒形のもの、圓錐形のものなどを用ひ、夜は紅燈、綠燈などを用ひることになつてゐる。それで沖へ、出やうとする船は、此のしるしを見て、出ることを見合せ、又航海してゐる船は、早く港へは、いって、難をさけるので

ある。
げんに、此の警報があることになってから、船のこはれたり、沈んだりすることだ、たいそう、少くなつたと云ふことである。

第七課 氣のかはり易き男

世に愚なる男あり。

はじめは、そのままになりたるが、

手にさる斧のが重しとて

やめて木挽こびきをかはりたり。」

されども、日々に、大いなる、

鋸のこぎりもつが苦しとて、

またも、木挽をうちすて、

今度は大工となりにけり。」

大工は手斧があぶなしと、

恐れて、次は、屋根屋業。

屋根の高きに驚きて、

此れもつゞかず、つとまらず。」

次には、かはる、疊さし、

そこ厚しとて、此れもやめ、

鍛冶屋かぢやになりて見たれども、

夏の暑さに困りたり。」

農夫となりて、田を作る、

その職業をはじめしに、

「こえ臭ければいや。」といふ。

さてその次は何なるぞ。」

杵重ければ米搗も、

少しの間にて見限りつ。

紙屑ひろひをはじめしが、

賤しきわざにて、廢しけり。」

あゝ愚なるこの男。

今はなすべきわざもなし。

若き昔の怠を、

悔いて泣けども、いかにせむ。」

身は、はや老いて、手はきかず、

人のめぐみをたのみにて、

ちまたに叫び、門に乞ひ、

つなぐ命のあはれさよ。」

第八課 人の勤惰

二宮先生曰く一言を聞いても、人の勤惰を知ることができ

東京は水さへ錢が出る、と云ふは、なまけものなり。水を賣て

も、錢がとれる。といふは、勉強する人なり。夜は、まだ九時な

るに十時だと云ふ者は、早くねたがる、なまけものなり。まだ

九時前なりと云は、勉強心のある人なり。凡ての事下に目を

つけ、下にくらべる者は、必、下り向の惰者なまけものなり。たこへば碁をうって遊ぶは、酒を飲むよりよろし、酒を呑むは、ばくちよりよろし、と云ふが如し。上に目をつけ、上にくらべる者は、必、上り向なり。ふくく、心得べし。

近頃の世の中は、だんく、奢りなまけて、夜業などは、石油が高
いからひきあはぬ。」と云って何事をも爲さず、くだらぬ益もな
き事を話して、而も無益に大きな燈火を照らして、遊びすぐす
者多し、爲めに各々の家の經濟は、ますく、苦しくなりて、遂に親
先祖より譲りうけたる、大切な財産を失ふもの多し、注意すべ
き事にこそ。

第九課 胃の説諭

ある時、口が耳、目、鼻、手、足を集めて、相談會を開いた。口が云ふには

「諸君。今日、わごく、こゝにお集りを願ったのは、ほかのこと
ではありませぬ。あの胃についての事です。胃はわれわ
れが、一生けんめいに働いて、食物を送ってやるのに、いっかう、手
傳もせず、返禮もせず、唯ぬながら食って、遊んでばかりぬます。
われくは、まったく胃のために、道具に使はれてゐるのです。
實につまらないではありませぬか。以後、一同働くことを
やめて、一つあのぶしやうものを、こらしてやらうではあり

ませぬか。」

と云ふと、一同は「さうだ〜それがよい。それがよい。」といつて賛成した。

そこで、足は食堂に行くことをやめ、手は食物を口に持ちこむことをやめ、鼻は之を嗅ぐことをやめ、目は之を見ることをやめ、耳は食事の報知を聞くことをやめた。

かうして、二三日たつと、からだぢゆうが非常に衰弱してきて、耳は鳴り、目は暗み、手足はなえて、動くことも、どうすることも、できなくなつてしまつた。

そこで口はまた、一同を集めて「じつに、そんな事になりました。どうしたのでせう」といって相談してゐると、そこへ胃が來て。

「諸君。諸君はじつに、しやうのない事をしました。諸君は、諸君の送つてくれた食物を、私が、唯ながら食つて、遊んでゐたやうに思つてゐら、しやるらしいが、それは大きな誤解です。諸君が、からだの外部に居て、内部の事を知らないところから起つた、大きな誤解です。私は決して、遊んでゐたのではありませぬ。私は、私で諸君の送つてくれた食物を、一生けんめいに消化して粥のやうなものにしてゐたのです。それがさらに、腸で消化されて、乳のやうなものになり、血にまじつて、からだ中をめぐつたので、諸君も、た、しやに働くことができたのです。諸君は、私が諸君を、道具に使つてゐたやうに思つてゐら、しやるらしいが、それなら、諸君も私や腸などを道

具に使つてゐら、しや、たといはなければなりません。しかし、からだは、その各部分が、それぞれ、職務を盡すので、保つていけるのでありますから、誰れでもそんな、かつてな事を考へて、職務を怠るやうなことがあると、からだ中が衰弱しなければなりません。諸君が私をいぢめやうと思つて、食物を送らなかつたために、たうとう此通り、からだ中が衰弱したてはありませぬか。

諸君。もし、そこにお氣がつかれたなら、これから、すっかり心を改めて、めいゝ、其の職務をお盡しなさい。それが諸君のため、またからだのためです。」

と説諭した。耳、目、鼻、口、手、足は之を聞いて、さてはさうか。」と

ささつた、此れから、いしやうけんめいに、めいゝの職務を盡した。それで、非常に衰弱してゐたからだも、だんゝ回復してきたと云ふことである。

是れは一のたとへ話であるが、是れと同様な事が世の中には多くあります、心得ねばならぬ事である。

第十課 運の意義

二宮先生曰く、世の人、運と云ふ事に、心得ちがひあり。たとへば、柿、梨子などを籠かごよりうちあげる時、自然と上になるあり、下になるあり、上を向くあり、下を向くあり。此の如きを運と思へり、運と云ふもの、此の如き物ならば、頼むにたらず。如何と

なれば、是れ人事をつくしてなるにあらずして、偶然となるなればなり。再、入れ直してあける時は、皆前さちがふべし。是ればくちの類にして、運とは異なり。それ運と云ふは、運轉の運にして、つまり廻り合せと云ふものなり。即、善き原因あれば、其の結果として善運到來し、悪しき原因あれば、其の結果として悪運到來するものなり。故に積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あるなり。今爰に一本の草あり、現在若草なれども、其のものは種なり、其のゆくすゑは、花も咲き實もみのるなり、莖の長くのびるは、肥多き原因あればなり、莖の短かくてやせたるは、肥の少き結果なり。

聲もなく臭もなく常に天地は

書かざる經をくりかへしつゝ」

と云ふ歌は、此運と云ふ事を説明したるものなり。米を蒔けば米が生え、瓜のつるには茄子はならざるなり。此れ皆天理なり、運はつねに蒔ける原因ありて、生え來るものと知るべし。

第十一課 物の價

物の價は、其の物に効用あること、其の物の勞して、はじめ得らるゝ事によりて生ずるものなり。されば、大いに勞して得らるゝものなりとも、効用なきものは價あることなく、効用あるものなりとも、勞せずして得らるゝものなれば、また價あることなし。

たとへば、こゝに一種の石あり。きはめてまれなるものにして、大いに勞してはじめて得らるゝものなりとも、實用にも裝飾しよくにもならざるものなれば、之を買ふものなくしたがつて價あることなし。

また、日光、空氣のごときは、人の生命を保つに、必要にして缺くべからざるものなれども、地球上に、あまねく存在して、すこしも勞せずして得らるゝものなれば、之を買ふ必要なくしたがつてまた、價あることなし。水の如きも、またしかり。されど水は、大都會などにては、時として、價を生ずることあり。これ大都會などにては、おほむね、飲料水乏しくして、勞せずしては、得ることあたはざることあればなり。

次に物の價は、主として、需要じゆえうと供給きやうきうとの多少によりて定まるものなり。需用とは、買ふべき貨幣を有する人の物を買はむとする希望をいひ、供給とは、人の賣らむとして持ち出したる物の分量をいふ。されば、乞食の絹布を得むとする希望は、之を買ふべき貨幣なくての願なれば、需要とはいひがたく、農夫の凶年に備へむがために貯蓄せる米は、賣らむとして持ち出したる米にあらざれば、供給には加はらざるなり。さて物の價は、供給の需要よりも少きときは、高くなり、多き時は、やすくなるものなり。

たとへば、こゝに賣家一軒ありて、之を買はむとする人五人あるときは、其の五人は、おのゝゝ其の家の他人の手にわたらむ

ことをおそれて、争ひて、たかき價をつくべし。かくて其の家は、最も高き價をつけたる人の手にわたるべきなり。又此れと反對に、同様なる賣家五軒ありて、買はむとする人、ただ一人なる時は、賣家の持主五人は各其の家の賣れざらむことをおそれて、争ひて、其の價をやすくすべし。かくて最も價をやすくしたる人、其の家を賣ることをうべきなり。物の價は、此の如く、需要供給の多少によりて、ある時は、非常に高くなり、あるときは、非常にやすくなるものなれど、つひには普通の價にもどるべきものなり。普通の價とは、物を製造するに費せる費用と、普通の利益とを合せたるものを云ふ。たとへば、靴くつを用ふること流行し來りて、買手にはかに増すこ

きは、靴の價にはかに、たかくなりて、靴屋の利益、非常に多かるべし、かゝるときは、靴屋は、さらに多くの職人を雇ひ入れて、さかんに、之を製造すべし。又他人もその職業の利あるを見て、おのゝ争ひて、之を製造すべし。かくする時は、靴の供給しだいに増し來りて、價はやうやく、普通の價にもどるに至るべし。

又此れと反對に、價しだいにやすくなりて、普通の價よりも下るに至る時は、しだいに、其の製造高を減ずるがゆゑに、供給も、したがって減じて、價は又普通の價にもどるに至るべし。すなはち、物の價は、普通の價をもとゝして上下すといふべし。物の價は、かく普通の價をもとゝして上下するものなれども、

供給に限ある物、たゞへば名高き古今の書畫、古器物などの如きは、需要増すにしたがひて、其の價、ますます高くなり、需要の減ずるにあらざるよりは、決して其のやすくなることなきなり。すなはち、供給に限あるものは普通の價なしといふべし。

第十一課

はわい出稼人の手紙

拜啓。出發の際は、わゞく御見送り下され、ありがたく存じたてまつり候。海上、何の障もなく、去る二十日到着いたし候間、御安心下され度候。はじめ數日の間は、諸方を見物いたし、其の後は、當ホノル、に於て、製糖業に従事いたしをり候。

さてハワイは御承知のごとく、日本の東、およそ三千四百マイルの海上に御座候て、十二個の群島より成り立ち、面積は全体にて、わが四國ほどに御座候。もとは一獨立國に候ひしが、數年前アメリカ合衆國の一部と相なり候。

ホノル、はオアフと申す島にある、ハワイ第一の都會に御座候。市街の整へること、云ひ、學校、博物館、公園などの備はれること、いひ、西洋の都會にも劣らざるやうに御座候。こゝには、本邦人の商店多く、ことに、中央には、本邦人のたてたる、日本商會の、壯大なる建物も之あり候。

ハワイの人口は、およそ十五万人ほど、これあり、其の二割ほどは、土人にて、他は皆外國人に御座候。外國人のうち、本邦

人は六万人あまりにて他の外國人全体と匹敵するほどの
 多人數に御座候。本邦人の多くは勞働者にて、おもに製糖
 會社などに傭はれて、さたうきびの栽培、製糖などに従事い
 たし居候。日給は一圓以上に御座候へば、本國に居たる時
 よりは、収入はるかに多く御座候。したがって、巨額の貯蓄を
 なせるもの、多くありこの事に御座候。衣食住の有様は、あ
 まり本國と相違いたし居らず候。また本邦人の醫業など
 をいとなめるものも、多く御座候へば、かく遠き所にありて
 も、さらに、心細き事も之なく、全く本國にあるが如き心地い
 たし候。

當地は熱帶地方に候へば、よほど暑かるべしと思ひ居り候

ところ、四面皆海に圍まれをり候へば、海風常に吹き來りて、
 思ひ居たるほどには之なく、氣候の變化も少くて、よほど暮
 し易き方に御座候。

まづは、安着の御報知、かたく當地の模様、あらまし申し上
 げ候。敬具。

七月六日

叔父上様

佐藤徳藏

第十三課 母の愛

「獅子は、檻より逃げ出たり。

鐵のくさりを引き切つて。

こちらへ来るぞ。かまるなよ。

あぶなし。逃げよ。」と叫ぶ聲。

聲をきくよりのをのゝきて、

誰れもわが家にかけてこみぬ。

街はたちまちしづまりて、

人影もなくなりにつけり。」

こゝに一人の幼子は、

母の手許をたちはなれ、

井のほとりに居たりしが、

遊びのわざの楽しさに、

心奪はれ「逃げよ。」との、

聲も耳には入らざりき。

されどあはれや誰れ一人、

行きて助くるものもなし。」

獅子はたけりにたけりつゝ、

狂ひまはりて吼ゆる聲。

いよゝく近くなりたれど、

なほ幼子は餘念なし。

つひに來りぬ。そのそばに。

眼はもゆる火のごとく。

爪はつるぎをこぎたてゝ、

たゞ一口を飛びかゝる。」

この時髪をふりみだし、

走り出でたる一婦人。

見るより、誰れも叫びたり、

「あぶなし。止めよ。ひきかへせ。

行きなば獅子の餌となるぞ。」

あゝ。不運なる子の母よ。

行くとも、もはや救はれじ、

行かば二人が殺されむ。」

婦人は耳にも入れずして、

怒れる獅子に飛びつきぬ。

すでにくはへし幼子を、

獅子の口より奪ひとる。

獅子は驚く、そのひまに、

その子は、無事に救はれぬ。

かくて疵だになかりしは、

母の慈愛にほかならず。」

この有様を見し人は、

老いたる若きおしなべて、

母の慈愛の一念を、

強きものぞこ感じけり。

今までふるひをのゝきし、

他の子の母もいひけるは、

「われもわが子のためならば、
いかで命を惜まむ。」と。』

第十四課 自他共に喜ぶ天地の道

凡、吉凶禍福苦樂憂歡等は、相くらべての上の事なり。何となれば、猫の鼠を得て喜ぶ時は、鼠は苦みの極なり。蛇の喜び極る時は、蛙の苦み極る時なり。鷹たかの喜び極る時は、雀の苦み極る時なり。かりうごの樂みは、鳥獸の苦み。漁師の樂みは、魚介の苦みなり。世の中の事皆此の如し。此れは勝て喜べば、彼は負けて憂ふ。此れは田地を買って喜べば、彼は田地を失うてかなしむ。此れは利を得て喜べば、彼は損してかなしむ。

二宮先生の歌に、

ちうくこなげきかなしむこゑきけば、

ねづみの地獄猫の極樂。

されど、爰に彼も喜び、我も喜ぶの道あり、天地の道、親子の道、夫婦の道と又農業の道との四あり、是れ自他共に喜ぶ道なり。此の道は誠に、兩全完全の物なり、百事此の四を法とすれば、あやまちなかるべし。又先生の歌に、

おのが子をめぐむ心を法とせば、

學ばずとも道に至らむ。

それ天は生育の徳を下し、地は之をうけて、發生し。親は子を育て、損益を忘れ、ひたすら其の成長を樂しみ、子は父母を愛

敬す。夫婦の間亦相互に愛し、共に樂んで、子孫相續す。農父勤勞して、作物の繁榮を樂み、草木亦欣々として、繁茂す。皆相共に苦みなくして、喜ぶのみ、故に凡ての事、此の道を法とする時は、商法は、賣て喜び、買つて喜ぶ様にすべし。賣て喜び、買つて喜ばざるは道にあらず、買つて喜び、賣つて喜ばざるは道にあらず。貸借の道も亦同じ、貸して喜び、借りて喜ぶ様にすべし、借りて喜び、貸して喜ばざるは道にあらず、貸して喜び、借りて喜ばざるは道にあらず。百事皆此の如し、故に常に此心を以て法とせば、成功うたがひなし、よくよく心得べき事なり。

第十五課

動物と植物との關係

春野原を散歩してみると、花のあたりに、蜂、蝶、花虻などの多くの昆虫が集つてゐて、花の中に頭を入れて、蜜をすひ、花粉をからだにつけて、花から花へ、いそがしさうに飛んでゐる。昆虫は、かうして、植物から、そのすきな食物をとり、植物は、之によつて、其の花粉を他の花につたへることができるのである。秋林の間を散歩してみると、木の枝に、種々の鳥が來ては、美しく熟してゐる果實をついばんで飛んで行く。鳥類は、かうして、植物の、うまい果實を食ひ、植物は、動物によつて、其の種子を四方に散布することができるのである。動物と植物とが、生存上關係の深いのは、此の一二の例でも明かであるが、こゝに人の見るこゝのできないところに、大きな

關係のあることがある。

すべて動物は呼吸することによって、空氣中の酸素を吸ひ、之を体内で、炭酸がすこして吐き出すものである。炭酸がすは、動物の呼吸することによりて出来るばかりではない、物の燃えるときや、腐敗する時にもできるが、此れは動物の生活には、はなはだ害のあるものである。それでも、もし此の炭酸がすを消すものがなかつたならば、つひには動物は死んでなくなってしまうであらう。しかるにそんな事はなくて炭酸がすが出来るほどづゝ之を消失してくれるものがある、すなはち植物が之を吸ひとりて消失してくれるのである。

植物には、此の人間に害のある、炭酸がすを吸ひとり、人間及び動物に必要な酸素を吐き出す特別のはたらきがある。此のはたらきは、植物にとっては極めて大切なはたらきであって、若し植物が此の炭酸がすを吸ひとることができなければ、植物はつひには枯死するのである。しかるに植物が思ふままに成長し、繁榮することのできるのは、炭酸がすが絶えず供給されるからで、之を供給するには、他にいろいろの原因もあるが、動物の呼吸と云ふことも、大いに關係して居るのである。此の如く、動物と植物とは、相互に助けあって、深き關係をもつて居ると云ふのは、さても天地の道は妙なものである。

第十六課

忘れがたみ

(一)

安政二年十月二日時刻は夜の亥の刻かこよ。

「地裂け、天墜つるか。」とおどろかれたり。

みるく、百萬の人家、倉庫、神社、佛閣、倒るゝあり、崩るゝあり。家にしかれ、瓦に打たれて、死せるはいくばくやを知らず。一時に落ちくる千萬の瓦、一時に崩るゝ百萬の家の響は、泣き叫ぶ老若男女の聲に和して、たこふるにも、ものあらざりけり。

しばらくして、地の震ひ、やゝをさまり、崩るゝ家の響うすらぐにしたがひ、あそに残りて聞えしは、親を呼ぶ子の聲なり、子を尋ぬる親の聲なりけり。」

近くにも、遠くにも、殊にあはれに聞えしは、しだいゝくに、細

くなる、「助けてくれ。」の聲なりけり。

こさわりなるかな。梁におさるゝものあり、柱にはさまるるものありて、さなきだに、苦むものは多かりしに、地の震ひ動くこと、まだやむかやまざるに、四方の天は、一面に、しだいしだいに、あかるくなりて、さながら、晝の如くになれるは、所所、方々のつぶれ家より、火の炎々さ燃え出でたるほのぼが天をこがせるなり。

家につぶされて、身は動かず、もたえ苦む、そのところに、燃え來る火のために、煙にむせび、熱さにたへかね、のがれむと、してあせれども、のがるゝことは叶はねば、聲をかぎり、に叫べども、助けに來る人はなし。むごんこ云ふも、餘りありけり。」

その夜、わづかの時の間に、死したる人の、其の數は、幾萬なるかを知らざるが、中には、いともあはれなる、死に、ごまのものも多かりけり。

運強くして、ふしぎにも、其の身は萬死をのがれしも、親兄弟のむごんの死を、そぞろにかなしむものもありけり。

夫婦にてありながら、夫は梁におしつぶされしも、妻は、ねだのぬげたるために、下におちぬり、ふしぎにも、命を助かりたるものもあり。

梁にしかれたる、わが妻を、助け出さむとあせれども、力及ばざる、そのうちに、あたりは、一面、火になりて、みすく、妻のやけ死ぬのを、残して去れる夫もあり。

「妻子はいかがなしつる。」と崩れ家をさりのげ見れば、こはいかに。妻はあなぐらに、なかば埋り、片手には、をさなごの足をつかみ、恨めしげなる顔つきにて、色青ざめて死せるもありたり。

されば、この夜の不運のものには、あるひは、祝の席において、あるひは、かなしみの最中に、寢耳に水に死せるなど、語るもあはれなるものもありけり。

第十七課

忘れがたみ

(二)

これらは人の身の上なり。われにも、此の夜の話あり。父は、其の夜は、ごまりの番にて、家を守り、三人の子をまもりし

は母なりけるが、上なる子二人は、母の左右に寝ね、未なるは乳母に抱かれて、枕べにふしぬたりき。有るまじきことなれども、すは。地震よ。さいふとひさしく、乳母は抱きし子をすて、われのみ、外へ逃げて出たり。母は泣く子を抱きあげ、右と左にねたる子を、ゆり起さむとあせりしかども、をさなごをかへし身にて、大浪にゆらるるごとく動きつゝ、片手で起す左右の子を、冬の夜のね入りばなにて、起せども、いっかな、いっかな起くればこそ。うつゝにて、母につれられ、外へ出でたる、その時は、火事のために、すでに、まっかになりぬたり。じつに、危かりしは、われ、母子の命なりけり。そも、安政

の地震には、水戸なる舊家の、つぶれぬものはまれなりしが、われらが住ひしふる家も、潰れぬばかりに傾きたりけり。今においておもひ起すも、身の毛のよだつはこの夜のこそなり。この地震にて、われらが家の、もしや潰れもしたらむには、わが兄弟は死したりとも、誰れをも恨むべきならねども、もし母上が死したらむには、われらが罪にてありしならむ。

さりながら、この夜もし、われら親子が死したるならば、何ゆゑ、母が死せしかば、世に知る人はなかりしならむ。生くべかりしを、子のために、死せしなりとは、誰れか知るべき。今も、なほ忘れざるは、久しき昔の、この夜のこそなり。じつ

に、ありがたきは母の愛なり。母は、その身の危きをも顧みずして、一心に、子を助けむとなし、ものなり。

じつに、深きは母の恩なり。われに今日あるは、かゝる愛をもつて育てくれたる、母ありたるがためなり。われは、みづから知らざれども、わが母は、この夜のごとくに、その身の命の危きをも顧みずして、われゝの身をばまもりてくれたるは、幾度なりしか知れざるならむ。

この夜の事は、なき母の、われには、忘れがたみなり。この夜、われゝ、親子より、運つたなくして死せるものには、助かるべかりしを、子のゆゑに、死したる母は、いくばくなるらむ。

この夜のごときは、なき母の、われには、忘れがたみなり。この

夜のごとき天災の、もしけふの夜に起らむには、助かる命を、子のために捨てむとする母親は、いくばくなるか知れざるならむ。

じつに、深きは親の恩なり。忘れがたきは母の愛なり。

第十八課 地震

昔ノ人ハ「地下ニ大^{オホナマツ}鯨スミテ、ソノ頭ヲフリ、尾ヲ動カス時ハ、地震、タチマチ起ル。」ト考ヘタリ。サレド今ハ、モハヤ、カ、ル愚ナル説ヲ、信ズルモノナシ。

地震ノ原因ニ、三ツアリ。ソノ原因ニヨリテ、火山地震、地スベリ地震、カンラク地震ノ三ツニ分ツ。

火山地震ハ、多クハ火山ノ破裂ニヨリテ起ル、故ニソノ區域オ
 ホムネ狹小ナリ、我國ニテモ、寶永四年、富士山ノ破裂セシ時、明
 治二十一年、磐梯山ノ破裂セシ時ニ起リタル地震ハ、コレナリ。
 地スベリ地震ハ、大地ノ一部ノ急ニスベリ動クニヨリテ起ル。
 故ニオホムネ左右ノ水平動ナリ。明治二十四年濃尾地方ニ
 起リタルモノハ、コレナリ、火山地震ヨリハ區域モ廣大ニシテ、
 其ノ害モ、ハゲシキヲツネトス。
 カンラク地震ハ、大地ノ下ノ方ニ大ナル空洞アリテ、上ノ方ノ
 地盤ノオチコムニ、ヨリテ起ルモノナリ。故ニオホムネ上下
 動ナリ。ワガ國ニハ此種ノ地震ハ、ナハダ少シ。
 世界デ、地震ノ多キ所ハ、大平洋沿海ノ地方ト、地中海沿海ノ地

方トナリ。殊ニワガ國ハ、最モ地震ノ多キ地方ナリ、昔ヨリ、大
 地震ト云フベキモノ、三百八十餘回アリト云フ。安政二年ノ
 江戸ノ大地震、明治二十四年ノ濃尾ノ大地震ハ、其ノ最モ大ナ
 ルモノナリ。

第十九課 訓言

二宮先生曰く、利休の歌に

「寒熱の地獄にかよふ茶柄杓も、

心なげればくるしみもなし。」

とあり、此れ無心を云ひあらはしたるものなり。されど人の
 世の中に處するは、無心のみでは、用にあらず。一心を決定し

て、少くも心を動かさざるに至るを、尊ぶなり故に此の歌は、

「茶柄杓の様に心を定めなば

湯水の中もくるしみはなし」

とせざるべからず。それ富貴安逸を好み、貧賤勤勞をいとふは、なべての人の心なり。聳嫁たる者養家にあるを、苦しみにこひ、實家にかへるを樂しみ好むも亦人情なり。此の時其の身に天命あることを知り、天命に安ずべき理を深く悟り、養家は我家なりと決定して、養家の爲に、心力を盡す時は、實家に行かむと欲すとも、其の暇あらざるべし、此の如き心にて勵む時は、心力勤勞も苦にはならぬ者なり。農夫の寒暑に田畑を耕し、風雨に山野をかけまはり、車夫のたまの如き汗も、米つきの

苦しきも、火夫のあつさも、毫も苦にならぬものなり。よくよく心得べし。

二宮先生世渡の法を説いて曰く、

世上一般、貧富苦樂と云ひさばげども、世上は大海の如くなれば、是非なし。たと水泳術の、上手と下手とのみ、船を以て用便する水も、溺れて死する水も、水にかはりはあらず。時にふりて、風に順風あり、逆風あり、海のあらしき時あり、おだやかなる時あるのみ。されば溺死を免かるゝは、泳ぎの術一つなり。世の海を、おだやかに渡る術は、勤と儉と讓の三つあるのみ。

第二十課 子どもの看病 (一)

ある雨の降る朝、みなりのわるい、しかしたいそうかあいらしい子どもが、雨にぬればねをあげて、門司カドマツのある病院の受付にたづねて来た。此の子どもは、近所の村から、わざわざ、入院中の父をたづねて来たのである。

その父と云ふのは、數年前から、ハワイに出稼に行つてゐて、此の頃やうく歸國したのであるが、この地に着くやいなや、病氣にかゝつて、こゝに入院したのである。父は病氣ながら、とりあへず、故郷の妻に、此の市に着いたこと、病氣にかゝつて入院したことを知らせた。妻は、此の知らせを見て、非常に心配して、「すぐにも行つて見たい。」と思つたが、病氣の子どもがあつて、なにぶん手がはなせないので、長男に、よくよくいひふくめて、

父の看病によこしたのである。

受付は、取次人を呼んで、子どもを、父の病室に案内させた。病室はうす暗い、陰氣なく、すりくさい、大きな部屋である。二列にならんでゐる寢臺には、どれにもあをじろい、衰弱した病人が寝てゐて、死んだものゝやうに、目を閉ぢてゐるものもあれば、目をすゑて、天井をにらんでゐるものもある。うん／＼うなつてゐるものもあれば、足をばた／＼させてゐるものもある。取次人は、病室の片隅の方をゆびさして、「あそこにいらっしゃるのがあなたのおとうさんです。」といつてたちさつた。

子どもは、指さされた病人の所に行つて、一目見るやいなや、はらはらと涙を落した。病人は、しばらく横目で、子どもを見つめ

てぬたが、ものを一言いはうともしない。子どもは、ぢっと見て、其の様子の、かはってゐるのに驚いた。白髪は生え、鬚はのび、頬はこげ、目はくぼんで、父の以前のおもかげは、まるでうせてしまつてゐる。

「おとうさん。私です。今うちから来たのです。おかあさんがおいてになるのでしたけれど、弟が病気で、手がはなせないから、私が来たのです。おとうさん。忘れてしまったのですか。なぜだまつてゐらっしゃるのでですか。」

子どもは、かういひながら、病人の顔をのぞきこんだ。病人は、ちよつと見たばかりで、すぐ目を閉ぢてしまった。

「おとうさん。どうしたのです。私です。良吉です。」

良吉は、またかういったけれども、病人は身動きさへせず、たゞ、苦しきうな呼吸をつづけてゐる。

良吉は、涙ぐんで、椅子に腰をかけて、目もはなさず、父の顔を見つめてゐる。ぬるうちにも、考は、あれからこれへと移ってくる。をさゝしの先月、父に別れたこと、「留守の間はさびしいが、歸つていらつしやたら、ぐらしむきが樂になるだらう。」と、母のいつてゐたこと、こゝにつくやいなや、病院にはいつたといふしらせが来たので、たいそう、母がなげいた事から、つひには父の死後のことに移つて来て、もし父が死んだら、どんなに母がなげくであらうといふ事まで、心細いことばかり考へてゐたが、ふと人の聲がしたので、ふりかへて見た。

見ると、醫師が看護婦をつれて、一々病人を診察しながらみまはつてゐる。しまひに、良吉の父の番になった。醫師は、良吉を見て、「この子はどうした子だ。」とたづねた。看護婦が「この病人の子どもださうで。」と答へると、「さうか。」といて、診察にこりかゝった。そして脈をみたり、病人の胸を打ってみたりして、看護婦になにかさゝやいて、たちさらうとした。

良吉は、おそろしく、醫師に、「おそろさんの病氣はなほりませうか。」とたづねた。醫師は、「ずぬぶん重症だが、なほらないことはあるまい。あまり心配せぬがよい。」といて出ていった。

良吉は、これから、いしやうげんめいに、父の看病をした。掛ぶさんをなほしたり、手足をさすったり、看護婦が薬を持って來ると、

手傳つてのませたりして、一生けんめいに、看病をした。病人は、ときどき、良吉の顔を見る。しかし、べつに喜ぶ様子もない。良吉は、涙ぐんでゐるときには、いかにも解せないやうな顔つきで見つめてゐる。

其の日はくれた。其の夜、良吉は、父のそばにれた。明けると、またきのふのやうに、父の看病をした。今日は、病人も、すこしは元氣づいたやうである。良吉が、なにかいひかけると、口のあたりに、うれしさうな蒸みをたゝへて、ものをいひたさうに、唇を動かす。殊に、夕方、薬をのませた時には、すこし笑つたやうであつた。良吉は、喜んで、いろくのことを話した。「たぶん聞き取ることはできまいが、じぶんの聲の調子だけでもわかつて

くれたら。」と思ったので。

第二十一課 子どもの看病 (二)

かういふふうで、二日めはすぎた。また三日めも。四日めも。しかし五日目になって、病人は、とつぜん危篤におちいった。醫師は来たが、ただ、こくびを傾けてゐる。良吉が何を問うても、答もしない。良吉は、椅子の上に顔をふせて、しくしく泣き出した。しかし悲しい中にもうれしいことは、病人が危篤におちいりながらも、いくらか、ものゝみさかひのつくやうになった事である。病人は、つくづくと、良吉を見つめ、薬も、水も、もう良吉の手からでなければのまない。そして、しきりに唇を動

かして何かいばうとする。

其の日の午後四時頃、良吉は、病人の様子が、どうもよくないので、いろくくと世話をしてゐると、入口の方で「みなさん。どうも、ながく、お世話になりました。」と云ふ聲が聞えた。どこか、聞きおぼえがあるので、思はず、ふりむいて見た。そころが、人が、看護婦と、病室にはいてゐる。良吉は、「あっと。」叫んで、其のまゝ、そこにつつ立った。其の人も、ふりむいて、きくと、良吉の顔を見てゐたが、「あ。良吉ではないか。」と、いってかけよつた。良吉は、父の腕に、しかと抱きついた。看護婦は、様子を知らないのだから、あつげに、さらされてゐる。父は、しばらく病人の方を見てゐたが、むきなほつて、

「お、良吉。どうしたのだ。どうしてこゝに居るのだ。二三日前のおかあさんの手紙に、おまへをよこすこ書いてあつたから『今日か。明日か。』と待てぬたが、来ないので『どうしたところか。』と心配してぬたのだ。おまへはいつ来たのだ。どうしてこゝに居るのだ。おかあさんはどうした。弟はどうした。わたしの病氣は、思はず早くなほつたので、今退院するところだ。」

といた。良吉は、いろく話したいことはあるけれども、あまりのうれしさに、ことばも出ない。父は「さア来い。とにかくうちへ歸らう。」といて、良吉の手をとった。しかし良吉は、病人の方を見かへても、じくするの

「おい。どうした、歸らないか。」といて手を引いた。良吉は、まだ病人の方を見てゐる。病人は、のこりをしきうな様子で、ちつと良吉の顔を見てゐる。良吉は

「おとうさん。私は歸れませぬ。歸ると、あの人がかあいさうです。私は『おとうさんだ。』と思つて五日の間、看病をしてあげました。あの人は私を慕つてゐます。私の手からでなければ、薬も水ものみませぬ。ごろんなさい。ちつと私を見てゐます。それに、今はたいそう、わるうございます。もすこし、看病をさせてください。」

といた。看護婦たちは「感心な子どもですわね!。」とさゝやきあつた。

父は、當惑して、良吉の顔を見つめてゐたが、やがて、看護婦に「いたい、あの人はどうした人です。」とたづねた。看護婦は

「田舎の人ださうです。あなたは、ハワイから。」とおっしゃいました。が、あの人は、臺灣から着くさ、すぐ入院したのです。

『入院した日はあなたと同じ日だった。』と思ひます。こゝに來ました時には、もう正体もなくて、一言もいふことができません。ぬでした。き、ご家族は、遠い所にあるのでせう。このお子さんを、じぶんの子どもが來たのだ。』と思つてゐるのでせう。」

さういふ。病人は、まだ、良吉の顔を見つめてゐる。父は、たうさう思ひきつて、「それでは、残つて、看病をしてあげろ。」と、いって出て

行った。

良吉は、父を送つて、病人のそばに歸つて來た。病人は、さも安心したやうな様子であつた。良吉は、もう泣きはしなかつたが、前さかはらず、一生けんめいに看病をした。しかし、病氣は、ますますわるくなつてきた。其の夜、診察に來た醫師も「もう、今夜中はずまい。」といふ。良吉は、夜一夜、まんじりともせず、看病をしたが、はたして、六日めの夜明頃、病人は、かすかな目をあけて、良吉の顔をながめながら、息をひきこつた。良吉は「わ。」と泣きふした。

看護婦は「良吉さん。もう、泣いたつて、しやうがありません。早く、おとうさんの所へお歸りなさい。親切に、よく看病をして

おあげなさいました。」といった。やがて、良吉は起きあがったが、涙ぐんだ目を、寢臺の方へ送って、「をぢさん、さよーなら。」と、ふりかへりく出て行った。夜は全く明けはなれて、波止場の方に當って汽船の汽笛が、うなるやうに聞えた。

第二十二課 孝子ピール(二)

イギリスのロンドンの場末の裏屋の一間に、ピールは、わづらってゐる母親の看護をしながら、枕もとに坐って、しよんぼりしてゐる。けふは、もう、パンも無く、錢もない、ピールは、けさから何もたべず、平氣で介抱はしてゐるものゝ、これからさきは、どうなることかと、心細くてならぬ。

涙ぐんで、そと立ちあがって、窓ぎはによつて、外を眺めてゐると、向うから、旗を先に、賑やかに喇叭、太鼓で囃したて、音楽會をふれて來た。マリプラン女史といふ、名高い唱歌師が、今夜、さるところで、新曲を歌ふといふ、まへぶれてあつた。

ピールは、去年、マリプラン女史が歌つた或小歌が、一枚ずりになつて、何萬枚となく賣れたことを思ひだした。

自分が、母の介抱をしながら、こしらへた小歌がある、もし女史に歌うて貰つたら、すぐにも、立派な賣物にならう。もしさうなれば、母親の藥も、食物も、思ふまゝに買はれやうものを、と思つた。一所けんめいに頼んだら、きいてくれさうなもの、と思つた。さう思ふと、子ども氣にも、うやもたてもたまらない。机の引出し

から紙をさがして、ペンを走らせて、自作の歌を書いた。そして寝て居る母の顔を眺めて、すぐにうちを駆け出した。マリブラン女史は、或ホテルの一室に、休息してゐた。すると、見も知らぬ子供が尋ねて来た。頬の赤い、黄色なちゅれ毛の肩にかゝった、かあいらしい十ばかりの男の子で、おめた様子もなく、女史のすぐ前まできて、一禮した。「母様がこの間から、わづらつてゐますけれど、けふからは、薬を買ふ錢も、パンを買ふ錢もありませぬ。おじひに、此の歌を歌うて下さい。さうしたら、本屋さんに頼んで、一枚ずりにして、賣子になって、錢を貰ふつもりです。」と、いって、卷いた紙を出した。

女史は受取つて、口のうちにで読んでゐたが、やかて、驚いた体で、ピールの顔をながめ、「お前が、これを作ったのかえ、「まア。」と、しきりに感心し、さて幾たびも、読み返して、「よろしい。今夜、これを歌ひませう。そして、お前も、音樂會においてなさい。」といへば、「ありがたうございますけれども、母様が一人で、さびしうございませうから。」といふ。「は、さんのところへは、私の方から、看護人を作りませう。案じないがよろしい。ぜひおいでなさい。」と、いって、少しばかりの金と、音樂會の入場券とを與へた。ピールは、夢かさばかり喜び、途中で、母のたべる物や、薬を買つて、飛ぶ様にして、家に歸つた。

第二十二課

孝子ピール(二)

夜に入つて、ピールは母にすゝめられて、音樂會へ行つた。かういふ立派な場處へ出るのは、生れてから始めてであつた。ひきまぐや、舞臺^{ぶたい}のかざりは、目がくらむ程には、でやかで美しく、それに、いろ／＼の色の電燈が、八方にかゞやき、あま／＼へ右も、左も、立派なれき／＼の人たちばかりで、金の眼鏡や、金のくさりや、指輪や、腕輪^{わづら}が、きら／＼と反射して、こゝやかに、ここで、絹と絹のすれあふ音が聞える。

やがて、まくが上ると、賑やかな、音樂がはじまつた。それがすむと、マリブラン女史が、しづ／＼とあらはれた。拍手の音は、會場が震ふばかり。ピールは、思はず、息をこめた。あゝ、いつたものゝ、本當に、自分の作つたのを、歌ってくれるだらうか、と氣がも

めて氣がもめてならぬ。

女史は一禮して、しづかに歌ひ出した。やうれしや、自分が作つたのだ。ピールは、思はず、我れと我が手をにぎりしめた。高く、低く、ゆるく、はやく、物あはれな調子で歌ふ女子の美音に、満場、さながら、水を打つた様。曲の進むにつれて、皆の目は、涙にくもつた。やがて、拍手は、音樂堂を、震ひ動かした。

ピールは會場を出て、うちへ歸つたが、心は、う／＼と、りこなつて、足は、雲をふむかの様で、錢の事は、もこより、しばらくは、母のこころさへも、忘れた。

翌朝、マリブラン女史は、ピールの家へ來た。昨夜の歌を、ある本屋が、三百ポンドで買った、と知らせて、其の金子を、のこらずく

れた。

母親は、あまりの意外と、女史のしんせつさに感じて、只泣くより外はなかつた。

ピールは、成人の後ち、立派な歌を作る人となつた。

マリブラン女史が、ロンドンで病死した時、始終、その枕もとについてゐて、兄弟も及ばぬ看護をしたのは、此のピールであつたと云ふ。

第二十四課 女子の天職

人間として此の世に生れて、天職のないものはない。さうして此の天職をつくすこと、つくさぬことによつて、貧富貴賤の差別を

生ずるのである。男子には男子の天職。女子には亦女子の天職がある。然らば、女子の天職とは何であらうか。

夫をたすけて、一家の經濟を整へる、是れ其の一である。家内に波風のたゝぬやう、中よく治めて行く、其の二である。子女を育て、立派な人とならしむ、其の三である。常に清潔にきをつけ、衛生を重んじて、病氣にかゝらぬやうにする、其の四である。もし家内に病人あるときは、親切に之を介抱する、其の五である。料理の事をわきまへて同じ大根を煮るにも、うまく煮て、家内のものが一同膳について、楽しく食事の出来る様に注意する、其の六である。裁ち縫ひの道に上手であつて、常に衣服其の他を身にあふ様にきをつける、其の七である。また

此の外にかぞへて見れば、いくらもあらうが其の重なるものだけでも、こんなにたくさんあって、しかもむづかしい事のみである、先づ是れ等が女子の天職であつて、だれでも是れだけの事は女子に生れたつとめとして、やらねばならぬ事である。さて、是れ等のつとめをつくすには、第一、經濟の考へがなくてはならぬ。第二、女子は平和の神であると言ふ、考へがなくてはならぬ。第三、教育の考へがなくてはならぬ。第四、衛生の考へがなくてはならぬ。第五、看病の考へも入用である。第六、料理の法も知らねばならぬ。第七、裁縫の道に通じて居らねばならぬ。

是れ等の女子の天職をつくすのは、他家に嫁入をして、人の妻となつてからの事である。然らば娘の時代はどうか、と言へば此の天職をつくす準備の時代である。即、俗に云ふ、嫁入りごしらへ、の時代である。然るに世間には嫁入りごしらへと言へば、ただ裁縫を稽古し、着物をこしらへ、さへすれば、それでよいと満足して居る者が多い。しかし、まじめに婦人のつとめ、といふことを考へて見れば、決してそんな事で満足は出來ないのである、未婚の女子たるものは、此の大切な天職のあることを寸時も忘れず、十分遺憾なく準備をなすべきものである。さて、此の天職をつくすに、最もかんじんな、即、根本ともなるべき心掛けは何であらうか。

是れなし。たゞ一の「やさしい」心である、此のやさしい、美し

い女らしい心さへあれば、自ら此の天職はつくされるのである。もしも此の心にかくる所があれば、いかに立派な智識技能があつても、何にもならぬのである。故に娘の時代にあるものは、よろしく此の天職を深く自覺し、やさしい心を修養して、立派な婦人となる様、心がけるここがかんじんである。

第二十五課

勅

語

朕惟フニ我が 皇祖 皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我が臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我が國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ

夫婦相和シ朋友相信シ恭儉已レヲ持シ博愛衆ニ及ボシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進ンデ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重ンシ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレバ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ是ノ如キハ獨リ 朕ガ忠良ノ臣民タルノミナラズ又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我が 皇祖 皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スベキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ 朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

書 簡 文

轉居を知らず

文もて申上まゐらせ候私方此度都合に
より神戸市多聞通り一丁目拾五番地に
轉居致し候間此後の御文の御たよりは
右の住居にあてゝ御送り被下度候尙又
神戸に御こしの節は是非とも御立ち寄
りの程願はしく存じ候

先は右御しらせ迄かしこ

病氣快復をしらす

(歸宅をしらすも之による)

文もて申上候主人病氣中は度々御尋ね
被下かつ御見舞として結構なる品たび
たび頂戴致し御親切の程まことに辱く
厚く御禮申上候御蔭にてさしもの大病

も日増に快方におもむき昨今漸く本復
致し候就ては此品まことに輕少なから
祝ひの心迄にさし上げ申候

先は右禮旁御しらせ迄

あら／＼かしこ

法事に人を招く

來る七日は亡き父の何回忌に相當り候

に付法會相つとめ申度候間御遠路かつ
御多忙中恐れ入り候得共御繰り合せ御
參會なし被下度候先は右御案内申上度

かしこ

馳走になりたる禮狀

昨夜は大勢づれにて參上致し御心づく
しの御馳走に相成り誠に御禮の申様も

無之候借用いたし候御うつは持せつか
はし候間御受取被下度候末筆ながら御
主人様をじめどなた様にもよろしく御
禮申傳へ被下度候

先は御禮申上度

かしこ

約束をおとわる

明日婦人會に御同行申上候様御約束致し居候ところ折悪しく遠方より親類のもの參り候やう今朝申來り候に付殘念ながら御同道致し兼ね候間不惡御許し被下度會の模様は後日御めもじの上承り申度存じ候

まづは右御まどわり迄艸々

宿所を問合す

そつじながら文もて願上候御令嬢誰某様大坂に御在住のよし少々御依頼申度事有之候に付御宿所を承知致し度候何卒御めんたうながら此者に御しめし被下度願上候

先は右當用のみ

かしこ

縁談につきて問合せ

文して御ねがひ申上まるらせ候さて娘事もはや年頃にも相成候ゆゑふさはしき縁もあらばいづれへかかたづけ度存じ居候處此たび御近所なる松本様へ世話せむと申くれ候者有之素より不束なる者に候へば江らみ好みとては致さず候へ共何分生涯の大事のことゝておろ

そかにもならず候まゝ誠に御面倒恐れ入り候へ共左記のかどく今少しわかりかね候間あなた様は御近所の事なり尙又常に御心やすく御つきあひなされ候やう承り及び候まゝ御願ひ申上候間別に急ぐ事にも無之候へ共先方の御様子御きかせ被下度候先は右ねがひまであらくかしこ

記

- 一、先方の血統
- 二、先方御両親の氣心
- 三、御本人の氣心と村人のうけ
- 四、御家内及び親類和合の様子
- 五、御家内皆様の働きぶり

奉公口の周旋をたのむ

久しく御無沙汰にうちすぎ候處如何に
 御暮し被遊候哉御伺ひ申上候此方みな
 一みなおとにすゝし居り候間御心易う思
 し召し被下度候さて娘はる事當春小學
 校も卒業致し候間しつけの爲め奉公爲
 致度候まゝ御地にて確實なる主家之れ
 あり候はゞ御周旋被下度御承知の通り
 今年十五歳には相成候へ共何分親の膝

下にて甘え居り候事とて行儀作法など
 少しも心得申さず常に火のつく様に申
 候へ共母子の間はとかく愛になれて我
 まゝのみ致し居候かくては本人行く末
 の事も案ぜられ申候に付兩三年しほふ
 みの爲め奉公さするもよろしからむと
 存じ誠に御多用中恐れ入り候へ共御心
 當りもおはさば御世話なし被下度ひと

へに御願ひ申上候末筆ながら皆様へも
 よろしく御傳へねがひ上げまゐらせ候

かしこ

買物を頼む

承り候へば明日より京都御見物に御出
 でなされ候よしさつそくの御願ひには
 候へ共御序に西陣織帯地長女はるに買

ひ與へ度と存じ候に付地合ひ模様柄な
どは全く御元さまに御まかせ可致代價
は拾圓位のところにてよろしく候間せ
つかくの御遊びに御めんたうは重々御
察し申上候へ共何分よろしく御求め下
され度使の者に金拾五圓持たせ差上げ
候間御落手下され度候

かしこ

醫師をまねく

文もて申上まゐらせ候さて父事昨夜十
一時頃より腹のかげん悪しきやう申し
候て寐床に入り候處今朝三時頃より苦
しみ始め只今は堪へられぬとて殊の外
苦痛致し居候間御多用中誠に御氣の毒
に存じ候へ共御來診被成下度とりいそ
ぎ御ねがひ申上まゐらせ候

かしこ

故郷にある妹に贈る

絶えて御無沙汰いたし居候處御機嫌よろしく候よし何よりよろこばしう存候
となたも何のさはりもなう日々相暮し
居候まゝ御安心下され度候おまへさま
にも先日小學校卒業なされ候よし姉の

身にとりておよなう嬉しう存候母上
様にもおひく御年をとらせたまひい
事故おまへさま何かにつけて御辛勞の
御事と存候姉も來春には一度歸郷致
し度存候居候申す迄もなき事には候へ
共何かにつけてよく御氣をつけられ御
孝養願はしく存候此度は母上さまには
別に御手紙さし上げ不申候まゝ何卒よ

ろしく御申上げ下され度い

かしこ

舊主人に奉る

恐れながら文もて申上まるらせい先づ
以て御ぜんさま御奥様をじめ御家中さ
ま御機嫌うるはしくわたらせられ敷な
らぬ此身までもいとうれしき限りに御

座候何の御役にも相立ち申さぬ身を永
らく御目をかけさせられ候事身にあま
りてかたじけなく御禮申上まるらせい
御いとまをたまはりてよりをりく御
左右御伺ひ申べきの處つひく家事に
とりまぎれ心ならずも御おさた致し申
譯も御座なく候猶此たびは私事さる人
のおせわにて某方へ縁付の事に取きめ

候まゝ、憚りおほくは候へ共御心やすう
思召のほど

ねがひ上たてまつり候

かしこ

他に嫁きたる娘に

其の後はいかにくらし居られ候やかね
かね申聞おき候事故如才もあるまじく

とは推し候へ共第一に御兩親さまは云
ふに及ばず夫につかへて萬事すなはに
なさるべく候起ち居ふるまひもしとや
かによろづひかへめなるがよしゆめゆ
め少しの手わざを鼻にかけて出すぎた
る行ひ無之候様くれぐれも御心得なさ
るべく候又下女下男さては御隣り近所
の人々はたれも皆目をつけて何くれと

口さがなく云ひたがるはなべての人情
には候へ共つきあひ方一つにていかや
うともなるものに候へば此邊よくく
御心つけなさるべく候御勝手むきの事
などわからぬふしは母さまに御尋ね申
し御指圖御受けなさるべく候何分にも
老の身の唯そなたの事のみ思ひつゞけ
居候まゝ随分辛抱よく行くすゑ長かれ

と祈り居り申候まづは右まで

あらくかしこ

旅行先の夫に贈る

御出立遊ばされ候てよりいかに御すゑ
しなされ候やらむと明けくれ御案じ申
居候處去月何日の御文きのふ到着致し
とび立つばかり嬉しく拜見いたし先

以て何の御障りもなく御すゝし遊され候よし何よりうれしう奉存ひ御両親さまへも御文よみ聞え上げ候ひしにこよなく御喜びなされ候御両親さまはじめ私ならびに子供いづれも無事に御留守いたし居松田様よりも時々御尋ね下されおもて向の事は御取りさばき下され候事故何ひとつ不自由の事もこれなく

候まゝ其だん御安心被下度ひ小供兩人とも相かはらず學校へ通學いたし居先日の試験にいづれも優等の成績を得たりとて大喜びに御座候此たび兩人に申付あなたさまに御機嫌御伺ひの手紙したためさせ封じこみ申おき候少しの手傳ひも致さず本人の書きし儘に候へば次の御たよりに一言御はめ下され候様

願ひ上げ候御両親様よりは別に御手紙
は之れなく私よりよろしく申せとの事
に御座候

まはらぬ筆のあとやさき御はんど下
されたく候

かしこ

國語學びの栞卷の二終

明治四十二年十一月一日印刷
明治四十二年十一月三日發行

國語學びの栞

定價金拾五錢

兵庫縣姫路市龍野町

著者 小原 龜松

京都府何鹿郡綾部町郡是製絲株式會社内

發行者 波多野 鶴吉

京都市上京區孫橋通新柳馬場西入四十八番戶

印刷者 三宅 太郎吉

京都市上京區柳馬場二條南入等持寺町十番地

印刷所 合資商報會社



不許
複製

京都府何鹿郡綾部町字青野六十二番戶

發行所 郡是製絲株式會社

4
141

